

---

# 性別人間と幽霊人間

嵐金

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

性別人間と幽霊人間

### 【Nコード】

N9628Z

### 【作者名】

嵐金

### 【あらすじ】

高校2年生へ進級を果たした安藤未来。

春になり、部活動の勧誘がスタートする中、未来は、勧誘先で従兄弟に再会する

## プロローグ

吸血鬼、吸血天使、天界少年、魔界少年、人間天使……ここ数ヶ月で、色んな者に遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学んできた。

暁文のおかげで、自分に自信を持つことが出来た。

グレイのおかげで、自分の良さに気付く事が出来た。

瀬夏のおかげで、子供嫌いが治り、今は小さい子が可愛いと思えるようになった。

カラスのおかげで、素敵な彼氏を見つけることが出来た。

紅丞さんのおかげで、心から人を好きになることが出来た。

これからも、何かに遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学ぶだろう。……そんな気がする。

……って、いきなりエピローグのような感じになってしまったが、これはあくまでプロローグ。

今回は、幽霊体質になった人間と、久しぶりに再会した従兄弟の話。

## 噂話

4月。私は高2に進級し、紅丞さんは人間に戻り、無事に学校への復帰を果たした、月の後半。

「未来くん！！大ニュース大ニュース！！」

朝。綾子が、人がまばらに集まった教室で、大声で、しかもあろう事か”くん”付けで話しかけてきた。

「綾子……あんたねえ、いい加減にしないと私もそろそろ怒」

「あーあー！説教なら後で聞くから！！それよりも大ニュースだよ！！」

「まったく……何？」

「1年生に、スツゴクカッコいい眼鏡の男子がいるんだって！！もしかしたら、佐川先輩以上かもよ！？」

「カッコいい男子がいるなんて、正直な所、興味ゼロなのだが、」佐川先輩以上かも」と言う言葉に、少し力チンと来た。

「……紅丞先輩以上？」

「そう！！噂によると、近寄った女子はみんなその男子に惚れちゃうほどカッコいいらしいの！！……もしかしたら、未来も惚れちゃうかもよ！？」

綾子は何故か、ほかの誰よりも早く、私と紅丞さんが付き合ってる事と、同棲していることを探り当てた。私も紅丞さんも隠してたのに……もしかしたら、探偵にでもなれるのかもしれない。

「……あのねえ、私は顔で紅丞先輩を選んだわけじゃないの。たとえば、その男子が紅丞先輩よりもかつこよくても、惚れるわけないでしょ。」

私は、紅丞さんの事は、家では”紅丞さん”だが、学校では”紅丞先輩”と呼んでいる。

「ヒューッ！ラブラブですねぇ安藤未来さん！」

「はいはい……。」

「……でさつ、私ね、今日はその男子に、会いに行こうと思うんだ。だからさ、未来も一緒に行かない？」

「わ、私も？……なんで？」

「本当に惚れちゃわないかどうか、確かめたいのさ！……ついでに、演劇部の勧誘とかしちやえば？」

確かに、去年から、演劇部には女子の入部希望者が耐えない。……紅丞さんがいるのが原因なのは目に見えているが。

「でも、確かにこれじゃあ、演劇部がキャバクラになりかねないからな……うん、私も行くよ。」

「ありがとー未来ー。」

「で、その男子、なんて名前なの？」

「確かねえ……津谷つたに陸りくって言うんだって。」

「津谷、陸……あれ？……どこかで聞いたことあるような……？」

「ん？もしかして、知り合い？」

「いや、多分気のせいだと思う……多分。」

「そっか。じゃあ放課後に津谷君の所に行ってみよー！！」

綾子は意気揚々と自分の席に戻っていった。

## 部活

私は今、演劇部の活動拠点 講堂にいる。

今の時期、演劇部は、活動してはいなく、色々な生徒に勧誘を  
まわっている……いわば、勧誘期間真っ盛りなのだ。で、今日は  
勧誘方法の作戦会議の真っ最中。

関係者以外立ち入り禁止なので、綾子には講堂の外で待ってもら  
ている。

会議終了。

ある生徒はそのまま帰り、ある生徒は勧誘に行った。

私は、ちょうど津谷陸の話を出したところ、そいつを勧誘しにい  
けと言われたので、綾子と一緒にいくことにした。

「ついた、ここだよ。」

1年3組の教室前に到着。

「でもさ、綾子。もう放課後だし、さすがに帰っちゃったかな？」

意外と会議が長引いたし、有り得るかも。

「いやいや、聞いた話によると、津谷君は、辺りが暗くなるまで  
帰らないらしいよ。もしかしたらまだいるかも。」

綾子はそう言いながら、教室の扉をノックした。

ガラッと、扉が開く。

「はい？……あれ？」

そこにいたのは 見たことのある人物だった。

## 再会

噂の男子、津谷陸。

その容姿は、眼鏡をかけてはいるが、確かに顔立ちがよく、見た女子全員が惚れてしまうのも頷ける。

そして、彼の顔には、見覚えがあった。

「えっと……誰？」

彼は綾子の顔を見ながら質問した。

「私達、演劇部の勧誘で来たんだけど……。」「演劇部でも無い綾子が話し始めた。

「演劇部？」

「あつ、私は演劇部じゃなくて、こつちが演劇部なの。」「と、言いながら、綾子は私の方を見た。

「えっと、そつちの人は……もしかして、安藤未来？」「名前を言い当てられた。

やっぱり、私はこの人に会ったことがある。

「……もしかして、陸？」

「やっぱり、未来だよな！？」

陸の顔が一気に明るくなった。

「未来だあー！久しぶりーっ！！」

そして、あろう事か、私に飛びついてきた。

「うわっ！？ちよつと、陸！離れなさい！！」

「え？あ、ごめんっ。」

陸は私から離れた。

その光景に、綾子は目を丸くしていた。

「え？え？……未来、津谷君と知り合いなの？」

「えっと……私の、従兄弟なの。」「

「い、従兄弟お！？…初耳なんだけど！？」

「私も、会うまで忘れてたのよ。」

それを聞き、陸が食いついた。

「未来、忘れるなんてひどいよ。」

「ご、ごめん……。」

なんか、綾子と陸って、キャラがかぶってる気がする……。

「……で？今日はどうしたんだっけ？」

陸がワクワクしながら聞いてきた。……従兄弟相手に勧誘って、なんとなく罪悪感が……。

「えっ……と、陸、何部に入るか決めた？」

「んー……まだ。」

「演劇部とか、どう？」

「演劇部ねー……まだ迷ってる。でも、未来が入ってほしいって言うなら、入るけど？」

「じゃあ、頼めるかな？」

「おう。……顧問に入部届け、出せばいいんだっけ？」

「うん、それじゃ、またね。」

「はーいっ。」

私たちは、講堂に戻ることにした。

## 報告

講堂に戻ると、紅丞さんが勧誘に行かせた生徒を待っていた。

「紅丞先輩！」

紅丞さんに駆け寄る。

「あ、やっぱり未来だったか。」

「” やっぱり” って、どういう事ですか？」

「未来の足音が聞こえたんだよ。」

「あ、そう言うことですか……。」

紅丞さんは、4月の始めから、月の中頃にかけて、ある事件が原因で、人間ではなく天使になってしまっていた。のだが、カラスのアイデアのおかげで、無事、人間に戻ることが出来た。

でも、完璧な人間ではなく、私のように、人間ではない力を持つ事になってしまったのだ。

その力と言うのが、「五感がランダムにパワーアップする」というもの。

簡単に説明すると、特に何もしていないのに、聴覚・嗅覚・味覚・触覚・視覚のうちどれかが、ランダムに選ばれ、飛躍的にパワーアップしてしまうということ。

……パワーアップの限度は決まっているようなのだが、どのタイミングで、何をパワーアップさせるのか、は選べないようで、本人はいまだに慣れることが出来ずに困っているらしい。

この前なんか、睡眠中に聴覚がパワーアップしてしまって、自分の心臓の音が邪魔で一睡も出来なかった、と語っていた。

「……てことは、今、聴覚がパワーアップしてる、って事ですか？」

私は綾子から離れ、綾子には聞こえないくらいの小声で質問した

小声でも、今の紅丞さんには普通の音量に聞こえるだろう。

「ああ。……ついでに言うと、嗅覚もパワーアップしてる。」

「それは、大変ですね。」

「大丈夫だよ。」

小声で会話する私たちの後ろで、綾子がニヤニヤしながら私たちを見ていた。

「……ちよつとすみません。」

紅丞さんに断りを入れ、綾子の元へ向かう。

「ちよつと、綾子。何ニヤニヤしてんのよ。」

「いやあー、小声で何話してんのかなーなんて思って……。」

「別に、何でもいいでしょ？……気にしないでよ。」

「カップルの会話ほど気になるものはないよ？」

「はあ……つたく……。」

「で？先輩に津谷君の事、言った？」

「あ、言つてなかった。」

「……未来い、最近凡ミス多いよ？幸せ疲れですかあ？」

「嫌みつたらしく言わなくていいから。」

とりあえず先輩の所に戻る。

「……紅丞さん、聞いてました？」

また小声で話しかける。

「ああ。……新入部員か？」

「はい、それも、私の従兄弟なんです。会つのは……だいたい、5年ぶりくらい何ですけどね。」

「へえ……従兄弟……。」

……何故ジト目……。

「私、別に浮気しませんから。」

「まあ、それなら良いけど……。」  
すると

「あつ……。」

「どうしました？」

「嗅覚が元に戻った……。あ、でも視覚がパワーアップした……。」

「……なかなか休まりませんね。」

「ああ……本当、困ってるよ……。」

その時、

「未来ー、何してんのー。」

しびれを切らした綾子が私を呼んだ。

「……なんか、すみません。やっぱり綾子は帰らせるべきでしたね

……。」

「いや、別に大丈夫だけど……。」

私は再び綾子の元へ行った。

「……未来くん、愛し合うのは構わないが、私の存在を忘れないで

くれよ?」

「わかってるよ……。」

「……じゃ、私、用事思い出したんで、帰るよ。後は2人でお幸せ

に」。そんじやつ。」

綾子はカバンを持って帰ってしまった。

「なんなのよ、まったく……。」

「未来。」

後ろから紅丞さんが私を呼んだ。

「何でしょう?」

「俺たちも、もう帰るか。」

「でも、ほかの部員を待たなくていいんですか?」

「いや、ほかの奴らは、さつき帰った。」

「え、じゃあ私が最後の1人って事ですか?」

「そう言うことだ。……じゃ、帰るか。」

紅丞さんは、近くにおいてあるカバンを持って歩き出した。

も後に続いた。

私

## 手紙

「紅丞さん、ちょっと、教室に行きたいんですけど、良いですか？」  
「忘れ物か？」

「はい。……ノート忘れちゃって。」

「わかった、一緒に行くか。」

「はい、ありがとうございます。」

俺と未来は、2年4組の教室に向かった。

「ちょっと待つててくださいね。」

未来は俺を入り口に残し、教室に入った。

窓側の、一番後ろ。恐らくそこが、未来の席だろう。

「……あれ？」

机の中を探していた未来が、そう呟いたのが聞こえた。

「未来？どうかしたのか？」

「なんか、手紙が入ってるんです……。」

手紙？まさか……ラブレター？

俺はとりあえず教室に入った。

「あ、勝手に入っちゃダメですよ。」

「いいだろ……で、手紙ってなんだ？」

「これです。」

未来が机から出したのは、茶封筒に入った手紙だった。……「丁寧  
に、封に糊付けされている。」

「誰からだ？」

「差出人が書かれてないんです……開けて見ますか？」

「未来が見たいと思うなら、開けてもいいんじゃないか？」

「では、失礼して……。」

未来は指で器用に封筒を開け、中から手紙を取り出した。

「な、何？これ……。」

未来の顔が真っ青になった。俺も手紙を覗いてみた。手紙には、まるで血のような真っ赤な字で、”お前に絶望を味あわせてやる。”とだけ書いてあった。

「不気味だな……。」

「一体誰が……。」

未来は脅えるように、封筒に手紙をしまった。

「未来、そんな物、捨てた方がいい。どうせ誰かのイタズラだろ。」

「そう……ですかね。」

「ああ。…何かあっても、俺が守ってやる。」

「紅丞さん……ありがとうございます。」

未来は、手紙を封筒ごと、くしゃくしゃに丸めてゴミ箱に捨てた。

「……それでは、帰りましょうか。」

「ああ。」

俺たちは玄関へ歩き出した。

…誰かのイタズラにしては、やり過ぎだと思う。だって、あの手紙の字……未来には言えなかったが、俺は今、視覚がパワーアップしているので解る。

あの字は、どう見ても 人間の血で書かれていた。

……妙な胸騒ぎがする。

帰る前に……

「紅丞さん、聴覚、今どうなってます？」

玄関で、未来が俺に質問する。

「まだパワーアップしたままだ……。」

「そうですか……それでは、聴覚が戻るまで、少し待ちますか？ 今外にでると、車が凄いいみたいです……。」

確かに、玄関からでも、外の車の走行音が耳に入る。

「そうだな……少し待つか。」

とりあえず、廊下にあるベンチに、二人で腰を下ろした。

……しばしの沈黙。遠くにある体育館からは、バスケットボールが弾む音が聞こえる。多分、バスケット部が部活中なのだろう。……それよりも……

「……未来。」

「何ですか？」

「もう少しくっついてもいいんじゃないのか？」

未来は何故か、俺から30cmくらい離れた所に座っていた。

「いや、だって、私が近寄ったら色々面倒になるかな、と思いきして……。」

「面倒？ ……どういう意味だよ？」

軽く未来を睨む。

「いや、その……紅丞さん、今聴覚がパワーアップしてるんですよ？ じゃあ私が近寄ったら、私の心臓の音が聞こえて、耳障りかなーと思っちゃって……。」

未来は申し訳無さそうに答えた。

「はあ……今更何言ってるんだよ。」

「えっ……？」

「俺は、例え未来の心臓の音が絶えず聞こえるような環境に置かれても、その音さえも愛せるといって自信があるぞ。」

「……………」  
未来の顔が赤くなった　可愛い奴だな。

「あ、ありがとうございます……………」  
未来は恥ずかしそうに、俺にくつつくように座り直した。

トクツ、トクツ　……………直接聞いているわけじゃないのに、未来の心臓の音が鮮明に聞こえる。……………もちろん俺自身の心臓の音も鮮明に聞こえる。

実は、脈拍が違う2つの音が、偶然重なる時があるのだが、俺はその音が好きなんだ。……………未来には内緒だけだな。

「ふふつ……………」  
つい、口元が緩んでしまった。

「紅丞さん？……………今、笑いました？」

「いや、ちょうど、未来と俺の心臓の鼓動が、ほぼ同じくらいのタイミングで重なって……………なんか面白くて……………」

そう言った途端、未来の心臓の鼓動が速まった。……………ああ……………タイミングがズれていく……………」

「おい、何照れてんだよ、タイミングがズれたじゃないか……………」

「うっ、うるさいです。気にしないでください……………」

「そうは言っても、聞こえちまうしなあ……………」  
俺は嫌みっぽく答えた。

「……………やっぱり私、離れた方がいいですか？」

「いやいや、そんなこと言っていないから……………」

「でも……………」

その時

キーン……………」

酷い耳鳴りが俺を襲った。

「……………」

思わず頭を抑える。

「紅丞さん？……どうしたんですか？」

「いや、ちよっと耳鳴りが……。」

数秒後、ようやく耳鳴りが止んだ。

と、同時に、心臓の音が聞こえなくなった。

「……聴覚が元に戻ったみたいだ。」

「そうですか。……それじゃあ、帰りましょうか。」

未来は立ち上がった。……俺も後に続いた。

## 帰り道

「未来、手、繋ぐか。」

急に、紅丞さんからそう言われた。

「……今はほかの生徒もいないみたいですし……良いですよ。」

私は、無防備だった紅丞さんの右手に自分の左手を　俗に言う、

”カップル繋ぎ”してやった。

「え？こ、これって、カップル繋ぎ？」

紅丞さんが予想以上に焦っている。

「何焦ってるんですか？紅丞さんから誘ったんですよ？」

「いや、そうだけど……。」

紅丞さんは恥ずかしがって俯いてしまった。……なんか可愛い。

「さあ、行きましようか。」

私たちは家に向けて歩き出した。

「そういえば、紅丞さん。」

「何だ？」

「今、視覚がパワーアップしてるんですよね？」

「ああ……2キロ先の道路標識が見える。」

「視覚がパワーアップするって、視力が上がるだけなんですか？」

「いや、高速で動く物が見えたり、見えちゃいけない物が見えたりする。」

「見えちゃいけない物って、何ですか？」

「それは、アレだよ、その………忘れてくれ。」

「嫌です、教えてください。」

「……。」

「紅丞さん？」

「お、俺は悪くないぞ。視覚が勝手にパワーアップするから。」

「言い訳なんて聞きたくないです。何が見えてるのか教えてください。」

「……………」

次の瞬間、紅丞さんは私の手を振りほどき、走り出した。

「あっ！！紅丞さん、逃げないでください！！」

紅丞さんは、男のくせに体力がそんなに無い。…………女とはいえ、中学時代は空手を習っていた私に適うはずがなかった。

私は紅丞さんの腕を掴んだ。

「ほら、捕まえましたよ！！」

「！？…………お前速すぎるんだよ！！」

「紅丞さんが遅いんです！！さあ、もう逃げられませんよ！」

「頼む！許してくれ！！」

「許す許さないの問題ではなく、言う言わないの問題でしょう!？」

「つ…………じゃあ、言わない！！」

子供か、まったく…………でも、私もそろそろ気にし過ぎかもしれない。

「はあ…………わかりました。このことは忘れます…………」

「助かった…………あつ…………」

「どうしました？」

「視覚が元に戻った…………」

「てことは、今は普通の状態ってことですか？」

「…………いや、触覚と味覚が一気にパワーアップした…………」

「触覚って、ヤバいじゃないですか。」

「風が身体に当たって痛い…………」

「大丈夫ですか?…早く帰りましょう。」

「だな…………」

紅丞さんは痛みに耐えながら、足早に帰宅した。

## 自宅

「痛ってえー……。」

紅丞さんは玄関に入るなり、私に寄りかかって来た。

「だ、大丈夫ですか!？」

「平気……。ただ、足痛い……。」

「それ平気じゃないですよ!?!しっかりとってください!?!」

玄関での騒ぎを聞きつけたのか、家の奥からグレイが走って来た。

「未来ちゃん!紅丞!?!どうかしたの!?!」

「あつ、グレイ……紅丞さんが……。」

「紅丞、大丈夫?」

「全然……身体中痛すぎる……。」

何で私には”平気”って言うておいて、グレイには”全然”なのだろう……。

「とにかく、一度部屋に運ぶから、グレイ、手伝って。」

「うん。」

部屋に入り、紅丞さんをベッドに寝かせた。

「痛っ……なあ、もう少し優しくしてくれないか?」

「男なんですから、耐えてくださいよ。」

「でも……痛い……。」

触覚がパワーアップすると、文字通り、触る感覚が鋭くなるので、そよ風とか雨とかが痛く感じる……らしい。

以前、いたずらで耳に息をフーツとやった時にはキレられた。…紅丞さん、キレると意外に怖い。

「紅丞、まだ痛む?」

「うん……しばらくほっといてくれ……そのうち元に戻るから……。」  
「わかった。」

「紅丞さん、何かあったら遠慮せずに言ってくださいね?」

「ああ……ありがとう、未来。」

「……じゃあ、私たち、リビングにいるますから、元に戻ったら降りて来てくださいね。」

「わかった……。」

私とグレイは部屋を後にした。

「ねえ、グレイ。紅丞さんの事なんだけど……。」

「紅丞が、どうかした?」

「あの”五感がパワーアップ”する力、どうにかならないかな?その……操れるようになる、とか。あのままじゃあまりにも紅丞さん可哀そうで……。」

「気持ちはわかるけど、さすがにそれは僕にもカラスにもどうしようもないよ。紅丞が慣れるようにならないと……。」

「でも、触覚がパワーアップしたり、聴覚がパワーアップしたりすると、さすがに生活に支障がでてしまうし……。」

「うーん……一応、姉ちゃんに相談してみるよ。」

「メルに?どうして?」

「姉ちゃんは吸血鬼よりの天使だし、もしかしたら、何か知ってるかもしれないからね。」

「ふーん……確か、グレイとメルさんって、腹違いの姉妹……なんだっけ?」

「うん。姉ちゃんは僕のパパが僕のママに会う前に会った吸血鬼の間に生まれた子だからね。」

今、物凄くわかりづらい言い方された気がする。

「と、とにかく……メルに聞けば何かわかる?」

「あくまで可能性だけだね。」

「わかった。ありがとう。」

その時 携帯のバイブが鳴った。ディスプレイには知らない電話番号が載っていた。

「……誰だろう？」

出てみた。

「もしもし！」

…陸だった。

「陸！？…あんた、私の電話番号知ってたっけ？」

「いや、あの後、日比野綾子って人を見つけて、聞き出した。」

綾子…なんてことを…。

「未来ちゃん、どちらさま？」

後ろから 그레이 が声をかける。

私は携帯のマイク部分を抑えながら

「私の従兄弟。…ちよつと待っててね。」

再び携帯を耳にあてる。

「で、陸、何の用？」

「ちよつと聞きたいことがあってな。……未来、彼氏いるって本当か？」

「え？あ、まあ一応……綾子から聞いたの？」

「うん。……驚いたよ、まさか未来に彼氏がなあー…未来って、同性愛者だったっけ？」

「違う。」

即答しといた。

「え？違うの？てつきりそうかと…。」

「んなわけないでしょ、女の時の私の彼氏よ。」

「じゃあ、男の時はどうやって接してるんだ？」

「男の時は…女になるまで接してない。」  
「っていうか、男になった時は速攻、暁文やグレイに血を分けて女に  
してもらってるから…なんて、陸に言えるわけない。」  
「てか…あれ？確か未来って、怪我すると性別変わるんだよな？」  
「いや、それ、違うみたいで…最近わかったんだけど、大量出血  
すると性別が変わるらしいのよ。」  
「てことは、いつも大量出血して性別を変えてる…ってことか？  
何のために？」  
「何のためって…。」  
「考えてなかった…。」  
「未来？もしもし？」  
「あ、ごめん、その…何のために変えてるのは、ちょっと言え  
ない…かな。」  
「ふーん…まあいいや。んじゃ、そろそろ切るぜ。」  
「うん、またね、陸。」  
「おうっ。」

電話を切り、携帯をしまう。

「未来ちゃん、従兄弟って…未来ちゃんの性別の事知ってるの？」  
「うん。」  
「その人、学校の友達？」  
「友達って言うか…後輩、かな。会ったのは5年ぶりなんだ。」  
「5年ぶりってことは、小学校以来、ってこと？」  
「そういうことになるね。懐かしいな…小学生の時はずっと一緒  
に遊んでたよ、家が近所だったし。」  
「へえー…。」  
なぜかグレイがニヤニヤしながらこちらを見ている。  
「…グレイ、何か企んでる？」  
「い、いやっ、別に？」

あ、目え逸らした。

「グレイ？」

軽く睨む。

「いや、その……ただ、従兄弟だったら、小さいころ、未来ちゃんがどついう子供だったのか知ってるのかなー？とか思ってた……」

「あぁー……」

小さいころの私……か。そういえば1度もそついう話をしたことが無かった。

まあ、簡単に言うと、小さいころの私は、小学校、中学校と、9年間、立て続けにイジメにあつてた。

ことあるごとに暴力を受け、そのたびに性別を無理矢理変えられて……という毎日だった気がする。

気がするつていうか……正直な話、辛<sup>つら</sup>すぎて無意識のうちに記憶から消去してしまった部分があるので、詳しくは覚えていない。

「……ま、そのうち話すよ。」

「うん。楽しみにしてるね。」

多分、話す事はないだろう。グレイには刺激が強すぎるかもしれない。こついう約束は自然に忘れてもらった方がいい。

「未来、帰つたのか？」

玄関の奥の方から暁文が歩いてきた。

「あ、うん、ただいま。」

「おかえり。……今、いいか？」

私は小さく頷き、暁文に近づく。

暁文は私を抱き寄せ、首筋の噛み痕にあわせるように歯を突き刺した。

「痛つ……暁文、グレイがいるんだから、もう少し慎重にやったほうがいいんじゃない……？」

「ん……そうだな。」

暁文は私から離れ、肩を掴み、吸血した。

「……終わったぞ。」

暁文は俺から離れた。

俺はゆっくりとソファに座る。

「なあ、未来。」

「何？」

「出来れば、今度から背伸びしてくれないか？……歯が刺しづらいからさ。」

「解った。でも、それだったら、座って吸血した方がよくないか？」

「まあ、最初はそうだったけど……今は立ったままの方がやりやすいんだ。」

「ふーん……じゃあ、次からは背伸びすればいいんだな？」

「ああ、頼む。」

暁文はそう言うと、リビングの隅にかけてられているコートを着ると、リビングを出て行くとした。

「暁文、どこ行くんだ？」

「ちよっと、アルトのところ。」

「グレイは、一緒には行かないのか？」

「グレイは……どうする？」

暁文はグレイを見ながら質問した。

「他の吸血鬼のところには行きたくない……。」

「じゃ、未来と一緒にここにいてくれ。多分、夕方には帰ってくるから。」

「うん、気をつけてね。」

「ああ。」

暁文はリビングの扉を開けると、俺たちに背を向けたままこう言った。

「……未来、グレイに変な事するなよ？」

「したこと無いだろ！」

素早く反論すると、暁文は逃げるように家を出ていった。

「ったく……あの性悪吸血鬼……。」

無意識に、そう呟いた。

「未来ちゃん！そういうこと言っちゃ駄目だよ！！」

ヤバ、聞かれてた。

「ご、ごめんなさい……。」

暁文とグレイは相思相愛の仲だから、互いの悪口を誰かが言っているのとはかく許せないのだそうなの。

謝っても、グレイの瞳は黒いままだった。

「悪かったって……機嫌直してくれよ。」

とりあえず撫でながら謝罪する。

グレイは、吸血鬼とはいえ、天使の血が混ざった吸血鬼。撫でられるのには弱いのか、たちまち瞳がピンク色になっていく。

「もうっ……。」

最後には、機嫌を直してくれたようだ。  
すると

ピンポーン

家のチャイムが鳴った。とりあえずでることに。

「はい。」

玄関に行き、扉を開けると、そこにいたのは

「よっ！未来！」

陸だった。

## 従兄弟

「…………え？」

俺はつい、その場で硬直してしまった。

「おーい、未来ー？」

陸がわざとらしく俺の眼前で手を振る。

「えっ？あぁっ…………え？」

…………なぜ、ここが解つたのだろうか？俺と紅丞さんが同棲している事は綾子しか知らないはず　あ、だからか？

「いや、”え？”はこつちの台詞だよ。いつ性別変わったんだ？さつき電話したときは女だったろ？」

そうだった。まずい、話題を変えねば…………。

「えっと…………綾子に聞いたのか？」

「え？何を？」

「ここを。」

「え？…………ああ、うん。”従兄弟なら”って、特別に教えてもらったんだ。」

綾子の奴…………でも、陸なら良いか。

「陸、わかってると思うけど、このことは　」

「わかってるわかってる。これだろ？」

陸は自分の口の前に人差し指を立て、”静かに”のポーズをした。話が早くて助かる。

「　とはいえ、詳しい場所までは教えてもらってなくてさ。その辺歩いてる人に道聞いちゃったよ。」

陸は、少し照れながら答えた。　って、その辺歩いてる人？

「……なあ、陸。」

「ん？」

「その…今言ってた、歩いてる人って、どういう人だった？」

「えっと…かなり長身で、コート着てる、男の人だった。」

…… 晁文だ。

「そ、そうか……。」

「にしてもさ、その人、目が赤かったんだよ。それに、天気良いのに、フード被ってたし……これじゃあまるで」

陸は、俺の目を見ながら、こう言った。

「 吸血鬼。みたいだよな？」

瞬間、俺は、脳内の隅から隅まで凍り付くような感覚に襲われた。

「……って、未来？顔真っ青だけど、大丈夫か？」

「えっ？……ああっ、大丈夫、大丈夫……。」

嘘だ。ちつとも大丈夫じゃない。

「な、なあ、陸。どうして、その人が吸血鬼だっと思ってんだ？」

「いや、俺が今読んでるネット小説に出てくる吸血鬼の特徴と似てたからさ。長い八重歯もそうだし。」

…… なあんだ。そう言うことか……。

「未来ちゃん、どちらさまだったのー？」

ふと、リビングから 그레이 が歩いてきた。

「あっ。」

そして、陸の姿をとらえた。……どうやらもう帰ったと思って出て

きたらしい。

「うおっ！？未来、あいつ誰！？めっちゃめっちゃ可愛いじゃん！！」

「え、あ、いや、その……。」

陸の言葉に、グレイが頬を赤く染めた。 やめなさい、グレイ。

それやっちゃうとマジで可愛いから。

「し、知り合いの子だよ。……ちょっと待ってて。」

俺は慌ててグレイをリビングの奥に引っ込めた。

「知り合いの子って……金髪だったぞ？あの歳で髪染めるのって、やばくない？」

「か、海外の子なんだよ……。」

ちよっと苦しい誤魔化し。

「ふうん……ま、いつか。じゃ、俺、もう帰るわ。」

「ああ、またな、陸。」

「おうっ、んじゃなー。」

陸は元気に返事を返し、家を出ていった。

## 陸

どうしても、解らないことが1つだけある。

俺が、未来の住んでいる家に行く道中に遭った、あの吸血鬼。

そして、未来と話している最中に現れた、あのめっちゃめっちゃ可愛い吸血鬼。

未来はどっちの吸血鬼のパートナーなんだ？

同じパートナーをやっている身でこんなことを言うのはちょっと酷だが、未来には、吸血鬼のパートナーは合わないと思う。

……だって、出血で性別が変わるんだぜ？さつきだって、電話した後に会ったらもう男になってたし……っていうか、その事聞いたら無理矢理話題逸らされたし……

恐らく、電話のすぐ後に血を与えたんだろう。

……不安だ。自分の従姉妹が吸血鬼のパートナーをしている……これほど不安なことはない。

未来と俺は、共に一人っ子。だから、小さい頃は、本当の姉弟のように接していた。もはやそこには、従姉妹なんて壁はなかった気がする。

だから、不安なのだ。自分の姉の安否が、無性に心配になってしまふのだ。

……でも、本人は至って楽しそうだし……それならそれで、良いのかな？

不安を抱えつつ、俺は自分の家の扉を開ける。

”ただいま。”を言う前に、俺は何かを抱きつかれた。

「おかえりっ、陸。」

声の主に、耳元で歓迎される。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9628z/>

---

性别人間と幽霊人間

2011年12月30日03時49分発行